

「わたし」を生きる
～ことばで見えてくる世界～



2011年7月29日
考えるための日本語
NND48（グループ名）の文集

はじめに

レポートを書くとはどういうことか。大学に入ってから、私たちは授業の中で、課題として、これまでたくさんのレポートを書いてきた。しかし今回、この「考えるための日本語」を通してつくったレポートは、これまでのどのレポートとも全然違っているだろう。

レポートを書く目的と言ったら、まずは何か自分が伝えたいこと・わからないことがあって、それを知るためにいろいろな文献を読んだり、調べたりして、最後に自分の結論を出す、というのが一般的だろう。そこで、「なぜ自分がこのことについてレポートを書くのか」なんてことを、いちいち考えたりしない。

自分はなぜそのテーマなのか。「自分の過去・現在・未来をつなぐもの」としてテーマを選んだときに、なぜそれが自分について関係が深いのか。私たちはそれを答えるのにたくさんの時間をかけた。ただ「面白いと思ったから」だけでは答えにならない。なぜそのテーマに魅かれるのか。それは、自分だけの、自分だからこそその理由があるはずだ。普段の私たちの生活の中では考えることもないが、それが「わたし」と対話することで、「わたし」を考えることで見えてくる。

「わたし」を考えるとどういうことだろう。私たち5人は、それぞれのテーマを決め、それぞれのペースで、それぞれのレポートを書く目的で始まった。それが毎週、自分のレポート、自分の考えに、他の人からの意見、感想を述べてもらうことで、自分には見えなかった「わたし」が見えてくる。自分では当たり前になっていた、気付かなかった自分が、他人を通して見えてくる。そんな不思議な感覚を、この活動に参加したならば、みんな味わったのではないか。

そんなふうにしてできあがったレポート1つ1つには、「わたし」はもちろん、「わたし」を見つけるきっかけになった、5人全員が生きている。バラバラに、それぞれの世界からはじまった私たちは、そのレポートの中で「わたし」を中心に、1つの世界をつくりあげているのだ。

もくじ

II. レポート

1. 文系と私 1 ページ
——自分の理想を堅持しよう

理想がない人間はたぶん存在しないが、自分の理想を順調に叶えた人も少ないと思う。残酷な現実には色々な困難をもたらし、理想の実現の障碍になってしまう場合が多い。理想と現実の関係をよく理解し、自分なりの行き方を探し出すのは当レポートの目的である。

ゆもうれい
ユ孟令

2. 言語へのこだわり 11 ページ

言語を勉強する中で何が大切か、子供にどうやって外国語を習ってもらえばいいかといった質問を言語が大好きな私の視点から検討してみました。

フェルディナンド・マッハー

3. 私がなぜ聞く力に拘ったか 22 ページ
——対話を通して自分の悩みの正体を追求する

他人の日本語を聞き取りたいという強い気持ちがどんなことに起因したかを追究しているうちに、今の自分がどんな面で足りないか、これから頑張るべき方向が見えてきた。

そえん
曾艶

4. 「for you」を考える 33 ページ
——塾の先生としてのわたし

目の前にいる生徒のことを一番に考えるということ。その難しさ・葛藤に向き合い、本当の意味を探しました。

前原 舞

5. 異なる価値観に出会うこと 42 ページ
——私にとっての目的とは

自分とは違う価値観とぶつかったとき、あなたならどうしますか？理解はできても受け入れられない？
乗り越え方は人それぞれ。大切な人との対話を通して発見したわたしの解決策を書きました☆

横山 愛子

Ⅲ. おわりに 48 ページ

文系と私

—自分の理想を堅持しよう

ゆもうれい
ユ孟令

一、テーマ設定の理由

自分の過去、現在、未来を結ぶることという、まずは「文系」というものを思い浮かべる。私は小さいころから、理系より、文系の方が好きで、歴史知識や社会文化、政治軍事に対する関心が深い。現在も、日本語学科の学生として、日本の歴史や文化、政治などを勉強している。自分は文系にゆかりの深い人なので、将来も文系に関わる仕事に従事したい。しかし、それは自分の理想だけで、中国社会の現状にそぐわない恐れがあるそうだ。その理想と現実のズレを乗り越え、バランスを取ることがこのテーマの趣旨である。

文系と中国社会の現状の間で、ズレがある。なぜかという、社会思潮から社会地位に至るまで、文系は劣勢に置かれている。中国の学生なら、高校二年生になると、「文系あるいは理系」、選択せねばいけない。それは大学入試だけではなく、未来の進路にも影響を与えられる。私からみると、自分の興味や性格にそって選択するのが適当だが、社会思潮に違反するそうだ。中国における社会観念は理系を重視し、文系を見下げる向きがある。そこで、理系を選ぶのが当たり前のことで、文系を選べば変だと思われる。私自身も文系を選択したため、クラスメートにからかわれる経験があった。「数学あるいは物理が下手だから、文系しか選べないに違いない」と彼は思っていた。

その原因という、物理や化学に代表される理系を学んで、新しい技術や発明ができ、社会に貢献を与えられる。一方、歴史や政治などの文系的な学問を研究し、あくまでも抽象的なもので、社会への貢献は明らかに見えない。そこで、文系の学問の価値をめぐって、いろんな議論がある。私は、こうい

う思潮を納得できない。自分が学んできた文系知識を活用すれば、文化の分野でも社会に大きな貢献を与えられると信じている。文系の価値を証明して、すこしだけでも、そのような思潮を変えるのが私の理想だ。

しかし、この選択は勉強だけではなく、未来の進路にも関わる。理系より、文系の卒業生たちは仕事も探しにくいし、給料も低い。それで、文系が大好きだけど、「未来の進路のために放棄したほうがいい」と両親に説得され、最後に理系を選択した人も少なくない。文系の趣味を堅持し、未来も文系の仕事に従事したら、富裕な生活を過ごせないかもしれない。確かに、現実的な利益と自分の理想の間で、選択しなければいけない。

このテーマを通して、文系と自分のゆかりを振り返りながら、理想と現実の関係をよく考えてバランスを取れる仕方を探しようと思う。

二、対話活動

1、対話相手を選んだ理由

私の対話相手は、母国の大学の先輩である。彼は政治学科の出身で、文系に対する理解も深い。仲良しの友達で、お互いの考え方もよく分かって、理解しやすいと思う。今学期、彼も早稲田で留学していて、連絡も取りやすいし、会う機会もかなり多い。そこで、対話相手にしようと思う。

2、対話内容

(1) 文系を見下げる思潮が生じる原因

私 先輩も、私も、文系の学生ですね。今日は文系のことをめぐって、相談したいんです。

先輩 大きな話題ですね。答えられるように頑張ります。(笑)

私 高校時代の時、なぜ文系を選びますか？理系を選んだ人のほうが多いでしょう。

先輩 それはそうですけど、政治に対する興味が深いので、一流大学の政治学科に入りたいです。当時の友達ほぼみんな理系を選択し、私、少数派になりました。

私 私からみれば、中国では、理系を重視して文系を見下げる思潮があるそうです。先輩もそう思いますか。

先輩 そのような思潮がそんなに著しくないが、「文系の学生なら就職しにくいかな」とみんなは思っているのが事実です。

私 たぶん、理系の知識を学んで、新しい技術や発明ができ、社会に貢献を与えられます。しかし、文系の知識は全部抽象的なもので、その効用がはっきりと見えません。企業からみると、理系の卒業生は実用の人材で、文系の卒業生なら現実と離れる人です。文系の学生は就職しにくくて、自分の専門は甲斐があるかどうかでも分かりません。

先輩 そうですね。私が文系を選んだ時、友達は学校の外でラーメンを売

っているおじさんを指しながら、「未来のお前もそういう仕事をやるかもね」と私をからかいました。(笑)

私 私も「数学あるいは物理が下手だから、文系しか選べないに違いない」とクラスメートにあざ笑われました。どうして中国では、文系の地位が見下げられますか？

先輩 中国経済は目覚ましい発展を遂げたけれども、あくまでも発展途上国です。中国にとって、一番重要な課題は工業の発展や科学技術の進歩ですから、理系の学生が欠かさない人材です。社会において、文系より、理系を重視する思潮が生じるのは当たり前のことだと思います。政府の中でも、理系出身の高官が多いでしょう。

私 そうですね。胡錦濤も、温家宝も、理系出身の人ですね。

先輩 そして、今のように、経済が高速で発展している状況の下で、みんなは現実な利益に狂くて、「実利主義」になる傾向があります。それも原因の一つだと思います。

私 その現象を変えることができませんか。

先輩 それは仕方がありませんね。あくまで、文系の作用を判明することが非常に難しいので、文系そのものをよく理解できる人も少ないです。

この部分の話はレポートの由来に関わっている。中国では、その文系を見下げる思潮があればこそ、私はその理想と現実の矛盾を考える必要がある。現在の中国は途上国なので、政府にしても、社会にしても、生産力や経済の発展に直接に関連する理系の学問を重視する傾向がある。現任の温家宝総理はもともと地方の公務員で、中央政府のリーダーに認められるので次第に昇進して、終に総理になった。彼は当地の理系専門家として、新しい技術について、管轄地域に視察に行った元総理にプロフェッショナルで分かりやすい報告をしたわけである。このような「理系至上」の社会背景で、「甲斐がはっきりと見えない」文系の学問は軽視されるのも当たり前であろう。私の理想と現実のズレはその社会思潮に原因している。

(2) 文系の甲斐について

私 では、先輩は文系の学生として、文系とは一体どういうものだと思いますか？

先輩 なかなか答えにくい質問ですね。一言でいうと、文系は「人の心を建築する学問」です。

私 それはどんな意味ですか？

先輩 例えば、現代社会に入ってから、煩雑な日常生活に拘らり、いつもお金や仕事に悩んでいる人がけっこういます。彼らは人生の目的を失い、まるでお金のために生きているようです。その原因は、現実の利益を重視しすぎ、文系の教養が足りないかもしれません。文系の教養を積み重ねながら、人生に対する思考や自分なりの価値観も深くなれます。人類の心境や人生哲学を変える力を持っている文系は「人の心を建築する学問」とは言えるんでしょう。

私 確かにそうですね。しかし、それはただ個人的なレベルじゃないですか。全社会に対する貢献という点、理系より、文系の作用が非常に小さいという疑問を対応できません。文系は本当に無意義の学問ですか？

先輩 文系の範囲はとても広くて、政治や経済、法学などが全部文系に含まれます。文系は個人の考え方を变えるだけではなく、社会の道徳や価値観、制度を樹立する力もあります。

私 例えば？

先輩 確かに、理系は新しい技術を発明でき、人類の生活のレベルを向上させました。しかし、その技術を正しく利用するのも大事なことです。周知のように、原発に代表される人類が利用している現代技術はもともと戦争のために作られたものです。原発技術によって原子爆弾をつくり、人類にいろいろな災難をもたらした。そして、クローン技術も倫理問題に関わり、どう使えばいいか、様々な論争があります。それは全部文系と切り離せない問題だと思います。

私 なるほど。真剣に考えると、文系の効用は様々な分野にあります。

例えば、政府は優遇措置を提供すれば、科学の発展も順調に行けます。

先輩　　そうです。今、文系の甲斐があるかどうか、もう疑わないでしょう。

「甲斐がはっきりと見えない」というのは文系のデメリットだが、文系は無意義の学問だとは言えない。しかし、こういう社会背景の下で、自分の専門は甲斐があるかどうか迷っている文系学生がけっこういる。そこで、この部分は文系の価値について話し合った。文系は理系と違い、具体的な発明や技術を作り出せないけれども、我々の心境や人生への態度に大きな影響をもたらした。また、文系の研究は社会論理を設定したり、科学や経済の発展を促進したり、その貢献も無視してはいけないものである。

(3) 理想と現実の間にズレがある時

私　　文系の価値が分かったけど、現実はとても残酷です。就職の難しさはともかく、文系の仕事に従事しても、相変わらず暮らしにくそうです。

先輩　　確かにそうです。私のクラスメートたちは、卒業した後すぐに就職する人がかなり少ないです。原因というと、申請書をいろいろ出したのに、満足できる仕事がなかなか探せない感じです。みんな大学院に進学せねばいけません。修士以上の学歴がなければ、仕事が探しにくそうです。

私　　高校時代の友達は文系が大好きですけど、未来の進路のため、最後あきらめました。そういう人が少なくありません。

先輩　　確かに、現実を無視して、興味だけで進路を決めてはいけません。

私　　私が文系を選ぶのは正しくありませんか？

先輩　　そういう意味ではありません。進路は自分の未来に関わり、他人から何らかの指導ではなく、自分なりの考え方で決まらなければなりません。未来はどんな生活を過ごしたいですか？自分が望ましい生活スタイルを判明するのは一番大事なことです。

私 唯一の人生を有意義に過ごしたいので、できるだけ自分の理想を堅持し、自分が好きなことをやってほしいです。そのため、富裕な生活を過ごせなくても構いません。

先輩 それは今の考え方だけじゃないですか？未来は後悔するかもしれませんよ。「やっぱり、お金持ちのほうが恰好良いな」、「その時、もっと真剣に考えればいい」と後悔したら、どうしますか？

私 今後の価値観なら今で正しく把握できないものですが、進路はあくまでも今で決まらなければなりません。後悔しても、「それは自分の決定だ」と認識すると、どんな事実でも受け入れられるでしょう。

先輩 こういう覚悟があれば、社会現実や他人の嘲笑を押し切り、揺ぎなくて自分の理想を堅持できると思います。実は、他の角度からみれば、兪さんの文系の理想と現実も必ずしも対立のものではありません。

私 ええ？

先輩 例えば、一般的にからみれば、大学で文系学問の先生なら、給料もかなり低いし、公務員のような「グレーの収入」もないし、なかなか生活しにくいです。しかし、清華大学の政治学科の Y 先生は、給料も高いし、政府からの特別手当もあります。いつも、テレビ番組に参加して自分の学説を解説し、政治学界の泰斗として尊重されています。それは自分の理想と現実を完璧に結ばれた事例じゃないですか。

私 確かに、あの先生なら、中国の一流の学者なので、そのような社会地位を得るのも当たり前なことです。しかし、彼のようなレベルに達するのはとても難しいじゃないですか。千分の一ぐらいで、大部分の人はまったくできないでしょう。文系に従事している大部分の人は気楽だとは言えません。

先輩 そんなに自信がないですか？実は、自分の理想を堅持すれば、その分野で出世するのがそんなに難しくないと思います。自分の理想だから、興味が深くて、一所懸命努力する原動力もいっぱいあります。

私 そうですね。もし自分がきれいな仕事に従事したら、毎日いやいや

働いて、出世したい気持ちもどんどん無くなるかもしれません。

先輩　そして、時代の変更につれて、社会の思潮や需要も変わっています。Y先生の大学時代では、文化大革命の時代です。政治はとても敏感な話題で、なにか不適當な話を口走ったら、「反政府の罪人」と見なされる恐れがあります。政治との関係がちつともなければ良いとみんなは思っていました。しかし、Y先生は相変わらず政治を研究し、終に政治学界の泰斗になりました。彼の事例からみれば、社会の思潮や状況は固定の存在ではないで、そのために理想を放棄するのが残念ですね。現在、社会の現状に似合わないものは、将来で社会の需要にぴったりになる可能性がありますよ。

私　なるほど、分かりました。有難うございます。

第三の部分は、テーマの中心として、理想と現実の関係を考えた。対話する前には、自分の考えはあまりにも不足で、その視野も非常に狭い。理想と現実是对立のもので、必ず選択しなければならないと思ったが、実際にはそうではない。対話を通して、もう一回理想と現実の関係を考えて、新しい結論が出てくる。理想を堅持して、興味のあることに打ち込んでいる人は他の人より、原動力はより高くて出世しやすい。理想を堅持するために、一部の利益を放棄せねばならないが、その収穫も豊かだろう。そして、社会の思潮は固定の存在ではなく、変容しているものである。現在、社会需要に違反するものは、未来のブームになる可能性もある。

三、結論

子供の時、「将来の夢はなんですか」と問われたら、必ず「大統領になりたい」あるいは「ノーベル賞を受賞したい」と答えた。今は物事がよく分かっていて、そのような夢は自分と縁もゆかりもないと分かった。平凡な人なので、そんなに遠い夢をあきらめ、自分が好きなことを理想として堅持すればいいと思う。しかし、自分の期待を下げて、相変わらずいろいろな問題を避けられない。暮らしのために、終に自分が好きではない仕事に従事し、つまらない一生を過ごした人もけっこういる。

それはとても悲しいと思う。唯一の人生なので、嫌い仕事に拘られて、無駄に過ごしてはいけないと思う。できるだけ、現実の利益が少ないけど、自分の理想を堅持しようと思う。理想を堅持できるために、解決せねばならない問題は二つある。まずは、その理想は本当に有意義なのか？次に、理想と現実の間のズレに対して、どう取り扱えばいいか。

対話活動やグループの皆さんとの交流によって、文系の甲斐は一体なにか、もう一回考え込んだ。個人のレベルからみれば、文系は「人の心を建築する学問」で、人類の心境や人生哲学を変える力を持っている。そして、社会のレベルから見ると、科学の発展や技術の利用も文系と切り離せない。この文系の甲斐を判明したら、揺るぎなくて理想を堅持することもできる。

更に、理想と現実の関係についても、対話相手の言葉によって啓発される。自分の理想と現実は必ずしも対立のものではない。かえって、理想とすることを一筋に精進すれば、興味をあきらめて自分が嫌いな仕事に従事する人より、立身出世しやすいかもしれない。そして、現在、社会の現状に似合わないものは、将来で社会の需要にぴったりになる可能性もある。以上の理由からみれば、社会の現状に負けて、軽率に自分の理想を放棄するのはとても残念なことである。自分の理想は何か、よく考えて樹立した後、揺るぎなくて堅持して、やり続ければいいと思う。

四、終わりに

普通の授業なら、先生からの講義を聞いて勉強する形になる。それはもちろん大事なことだが、大学生として、知識の積み重ねばかりではなく、自分なりの考え方や価値観を育成せねばならない。つまり、他人に教えられるものではなく、自主性をもって、独立の考え方によって物事を理解する能力が必要である。

この授業は「テーマを探す」ことや対話活動、グループディスカッションを通して、自分にとって有意義なものを探し出して、深く考えることができ、興味深いと思う。

更に、この授業の趣旨というところ、自分の過去、現在、未来を結べるものを探し出すことだけではなく、このものは自分にとって、どんな意味があるのかよく理解するのも大事だと思う。例えば、授業の課題図書に言及された茶谷さんは、「一人でいる」ことをテーマとして、自分に成熟させる作用があると書いた。それに対して、私の場合は、文系を勉強し、現実的な利益がなくても自分の理想を堅持しようと思う。そういうことは、自分の価値観や人生への見方を変更でき、自分に成熟させられると私は思う。

言語へのこだわり

フェルディナンド・マッハー

動機文

私には大好きな趣味がたくさんある。その内、6歳の時に始めたピアノや、それ以上も早かった水泳など、子どもの頃からずっと関心を持ち続けてきたものがかなり多い。だが、いくら好きな趣味だとはいえ、それらは外国語の学習には適わない。なぜなら、私の過去と現在と結びついている趣味がいくつかあるが、私を未来へと導いてくれるのは言語だけだからだ。

勉強している言語の中で英語との付き合いが一番長い。10歳の時に習い始め、中学の頃段々英語で小説などを読むようになり、高2の時、言語以外の授業が全部英語で行われるインターナショナル・スクールに転校した。そして、高校を卒業し、イギリスの大学に入って、1年間もほとんど英語しか使わない生活を送った。その結果、英語が私にとって母語とそれほど変わらない存在になっている。それは能力のことだけではなく、言葉に対して感じる親しさのことでもある。長い間日常会話を英語でして、夢さえ英語で見えるようになったくらいにその言葉に慣れてきた。

しかし、英語よりも好きになったのは日本語だ。高校卒業後2年間数学を勉強したあげく、専攻を日本学に変えたほど、日本語が好きになったのだ。高校の時、日本人の友達が話している日本語を聞いて、その響きが気に入ったのは勉強し始めるキッカケだったのだが、勉強すればするほど、この言葉の魅力に引かれた。そして、2、3年勉強したら、日本に留学することができた。共通語として広く用いられていないにも関わらず、日本語も英語と同じように、私の人生の可能性を広げてくれた。

言語はこれからも、私にとって大切な役割を担うに違いないが、言語の学習に関しては、いまだに分からないことが山ほどある。外国語というものは、そもそもどう学べばいいだろうか。学校で6年間フランス語を勉強しても、あまり上達しなかった経験があるのだが、その時は、どうして上手くいかなかっただろうか。英語と日本語の場合と何が違っていったのか。不可欠な何かが足りなかったかも知れない。だから、外国語を勉強する中で何が一番重要なのかを検討してみたい。

言語習得には、どれだけ勉強しても果てがないから、このようなことを今さら考え

でも遅くはない。逆に今になってからこそ考えるべきだと思う。なぜなら、日本で就職する決心をしたからだ。それは、日本語を習うと決めただけでなく、日本語で生きることを選んだことを意味する。だからこそ、言語の学習はどうであるべきか、改めて考える必要を感じるようになった。

だが、そこではまだ終わらない。考えたいのは私のことだけではない。将来に私に子どもがいたら、その子どもにも言語を習う楽しみを知ってほしいからだ。だが、学校である外国語を勉強させられ、それが嫌になる子が多数いる。子どもはどのようにして外国語を習えば、そういうことにならないだろうか。

このレポートを書くことを通じて、以上述べたような質問に答えられるようになりたい。

対話報告

対話の相手として弟を選んだ。ある程度言語に興味を持っていることを前提に相手を探したのだが、弟が高校の時に生徒会長であったことは主な理由だった。その立場で、多くの生徒と関わったことがあり、自分の経験だけではなく、色々な生徒との交流で知ったことも背景に、私が考えたことのない事情にも気付いてくれるのではないかと思った。

(1) 言語学習における問題

私 いきなりこんなこと聞いて悪いけど、コンが最初に英語を習い始めた時は、それほど上手くいかなかったよね？

弟 英語が？

私 そのような記憶があるんだけど、…

弟 へえ？そんなことあったっけ？

私 勉強する気がなかったとか？

弟 ちょっと待って。今は英語が簡単だから、そんなことがあったとは？んー、確かにテストの前とか、よく母さんと語彙を復習してたと思うけど、それは最初のほうじゃなかったな。

私 いつのことだった？

弟 第8年の頃かな？うん、習い始めた時は全然問題なかったよ。前から言葉をいくつか知ってて、文も一つや二つ言えるぐらいだったから、最初は逆に簡単で退屈だった。すぐ面白くなったけどね。ちょっと問題があったのは、ラテン語のほうだったよな。それと間違えてるんじゃない？

私 そうかも知れない。

弟 ラテン語ではね、最初の半年なら語彙さえ覚えていれば、何とかなるから、いつもそれしかやっていなかったけど、ほんとは文法のほうが大切なんだよ。でも、それに全然気付かなかったから、文法の練習をほとんど無視してた。で、一年がたったら、少しも付いていけなくなった。

私 活用表を暗記するのが嫌だったから？

弟 うん、しかもそれを覚えるべきだとは分からなかったね、まず。

- 私 それで、やってない活用のところが段々たまってて？
- 弟 そうだね、気付いた時には、まだちゃんとやっていない文法が山々あって、やろうと思ってもそういう時間がなかった。毎週の授業で新しい文法が増えたし。英語のほうでは、文法がいつも簡単だったから、ラテン語もそうだろうと思って、授業で文法のところをやったら、全く注意しなかったね。
- 私 それで、どうなった、結局？
- 弟 しばらくそのまま困っていたけど、ある夏休み、分からない文法を全部実習で勉強した。結構大変だったけど、その後からは、いい成績が取れるようになった。
- 私 へえ、よくもそんなやる気を出せたね。
- 弟 まあね。(笑)

コメント

ラテン語を勉強した頃、まずどんなことを勉強する必要があるか分からず、困っていたのは面白いところだ。そして、それよりも印象的だったのは、勉強の仕方が分かったら、前にあまりなかったやる気があれほど出せたことだ。そこまでの言語学習を深くて暗くてどこへ行けばいいか分からない森に例えたら、勉強の仕方が分かった時に目の前に広い道が開いて、行き先が見えてきたとでも言えよう。

- 私 やる気と言えば、フランス語のほうはどうだった？
- 弟 嫌いだった。先生が最悪だったし、フランスが元々好きじゃなかったから。
- 私 ん？フランスが？どこでそういう印象を受けた？
- 弟 2,3回車で通った時とか。
- 私 リヨンの辺りのひどい交通渋滞がフランスの印象になった？
- 弟 うん。それに一回メッチャまずい料理を食べた時とか。
- 私 ふふ、覚えてるよ、それ。
- 弟 そういう事情があって、でフランス語を別に取りたくなかったけど、母さんに説得されたね。だから、やりたくないことを勉強させられたって感じで、さらにフランス語を拒むようになったと思う。
- 私 なるほど。俺もフランス語が最初からあまり好きじゃなかったけど、理由は全く違うな。いい先生だったし。多分フランス語の響きが好きじゃないから

嫌だったと思う。

弟 え？綺麗な言葉だと思うよ？よくそう言われてるんじゃない？

私 まあね。今は俺も少しそう思うようになったけど、最初はだめだったね。女っぽい響きで、「こんな格好悪い言葉を話したくない」って思ってた。だから、勉強する気も少しもなかった。

コメント

この部分では、子どもには、ある言語が好きか嫌いになるのに、深い理由がけして必要ではないということが明らかになった。大人の目につまらなく見える、日常的で小さな出来事が子どもに強い印象を与えるのに十分だ。

(2) 言語習得の成敗を決める要素

弟 勉強する気がなければどうにもならないよね。

私 ああ、俺の場合は、興味があるかどうかが一番重要だと思う。学校で6年間もフランス語を習ってたのに、高校を卒業した直後でも、簡単な日常会話にさえ困るようなレベルだった。そして今は、ほとんど何も覚えていない。

弟 使わないとすぐ忘れちゃうものだね、言語は。

私 まあね。でも、今言いたかったのは、フランス語に比べると、日本語が非常に速く習えたってことだ。たった一年間で、6年間勉強したフランス語より日本語のほうが上手く話せるようになった。

弟 うん、ビックリしたよ。

私 「興味があったからだ」という説明しか思いつかないな。勉強にそれほど時間を込めたわけではないから。毎日何時間もこつこつ勉強していれば、速く上達しても無理もないことだが、けしてそうではなかった。

弟 そこで聞きたいことがあるんだけど。ナンドは日本語に興味があったの？それとも日本と日本の文化への興味だった？

私 う～ん、6歳の時に家族で日本を旅行して以来、「日本って国があるんだ」というような印象がずっと頭の奥に残ってたけど、別に日本に行きたいから日本語を習い始めたわけじゃない。むしろ、日本語に興味を持つようになったから、高校を卒業した後で日本に来たと思う。

(中略)

弟 その時に2ヶ月日本に行ったから速く話せるようになったんじゃない？

私 う～ん、それも役に立っただろうけど、日本語が全然しゃべれずに日本に行ったから、日本語が使える場所は、教室のみだった。日本人とそのまま話せるようなレベルじゃなかったからね。2月目に世話になったホストファミリーとも最後まで英語でしか話せなかった。

弟 代わりに2ヶ月ドイツで勉強したら結果は同じだったということ？

私 そうでもない。確かに語彙や文法を同じぐらい覚えられたかも知れない。でも、その2ヶ月で得たのは、そういう知識だけではなく、言語感覚ってものではないかと思うんだ。よく説明できないけど、しゃべれるようにならなかったものの、日本語を2ヶ月も毎日受動的に受け入れることで、あの時、日本語となじみになった気がする。それは俺の日本語の学習の「基礎」となったかも知れない。

コメント

日本人と全然話せなかったから、慌てて行くのではなく、まず日本語の基本を国で勉強するべきだったと、悔しく思ったことがあるが、ここで初めて、「そうでもない」と、弟が投げしてくれた質問に答えられた。なぜなら、日本語に深い興味を持つためにも、日本語に対して親しさが感じられるためにも、一番いい方法だったと確信したからだ。

私 俺の経験では、興味を持ってるかどうかが一番大切だが、ある外国語を一生懸命勉強しても中々身に付かないという学生も結構いると思う。なぜだと思う？

弟 知ってるよ、そういう人。僕と同じぐらいやる気を出してるのに、英語を習うのがめっちゃ難しいと言ってる人とか。原因はなんだろうね。

私 生まれつきの性癖？

弟 そうは思わない。DNAによって、ある程度の傾きが決められているかも知れないけど、それは本の一部にしか過ぎないと思う。人の性格を形成していく経験、教育や環境のほうがずっと大切なはずだ。

私 性格や経験？子どもの頃よく本を読む人に言語の才能が付くということなのか？

弟 そうかも知れない。でも、言語だけのことではない。僕たちは子どもの頃からよくパソコンとかを使ってたから、今でも技術のことを人一倍はやく理解できる気がする。見たことのない携帯を渡されてもすぐ使えるようになるんじゃない？そういうことができない人もいるよ。

私 まあ、ボタンを一つや二つ押してみれば、何とかなるはずだけど？

弟 そう。技術の基本理念、つまり「試行錯誤」を悟っているから、技術の問題に合った行動が取れる。態度の問題でもあると思うけどね。

私 そうすると、お前がラテン語を習う時に問題を抱えていたのは、言語習得の基本理念を理解していなかったからだ？その場合は「文法は重要だ」が根本的な気付きで、活用表を覚えるのが基本的なやり方だね。

弟 そうだね。もちろんこうしろって先生に言われたことがあるはずだけど、そのアイデアを受け入れなかったから、それに基づいた行動が取れなかった。

コメント

有効な言語学習には興味と努力が必要だが、両方ともあっても何かが足りない場合がある。そこで、人と人の違いをDNAに責めたくなく、弟が「基本理念」という言葉を用いた。技術では確かに「試行錯誤」という基本理念があるのだが、言語の学習はそう簡単に一言で搾れるものではない気がする。勉強の仕方という要素があるのだが、人にはそれぞれ違う勉強の仕方が合っていると言えよう。しかも、各国語の特徴・構造などが言語によって大きく異なることがあるから、それらをみんな同じようにして理解しようとするのが一番いい方法だとは限らない。

(3) 勉強する言語が自由に選べたら？

私 言語の基本理念（言語とは何か）を理解してもらうためにも、言語に興味をもたらすためにも、子どもが第二言語を勉強し始める前に、外国語をいくつか紹介してあげたほうがいいと思う。第4年の時、一年間の間、ビデオや音楽、絵本などの分かりやすいものを使って、4か5ヶ国語を実際に聞いたり、見たりしてもらって、最後に、自分が勉強したい言葉をその中から選んでもらったら、言語学習に関する問題の多くが解決すると思う。

弟 へえ、面白いね。例えばどんなものを生徒に見せるんだ？

私 その国と関係のあるもので、ここでも知られているものもいい。人気のある

アニメとか、有名な歌手の公演とか、…

弟 その文化の特徴的なものとか？

私 ああ、もちろん。それに、例えば中国語やアラビア語を紹介するのなら、子どもにその言葉の文章を見せて、「私たちと全然違う字を使っている人達もいるよ」見たいなことを言って、生徒の興味を引けばいい。

弟 確かに、このようにして子どもを言語の世界に近寄せれば、第5年の時に本格的に勉強するようになったら、言語に興味を持っている子が今より多くなってくるかもしれないが、どんな言語を勉強するかという選択は、そのようなこととしても、子どもが自分で決めることはほとんどないと思う。

私 親がどうせ英語を勉強しろと言うから？

弟 そういう親が多いじゃない？

私 まあね、それは仕方ない。だがそうなっても、こういう活動に意味があると思う。生徒に外国語を習う手段、勉強の仕方も教えるから。それに、子どもの意見をちゃんと聞いてくれる親もいるかも知れない。

弟 生徒が無理やりに自分の気に入りと違う言語を勉強させられなくても、自然に親の考え方を吸い込んで、親が勧めてる言語を選ぶとは思わない？

私 違う外国語も面白く紹介したら、必ずしもそうではないと思う。「英語を勉強したら、いい仕事ができる」、「フランス語を習うといつか有利になる」とか、親にそのようなことを聞かせられても、それは子どもにとって意味のない台詞だ。普段は、外国語はどのようなものか、元々分からないから、そのような台詞を繰り返してしまうけど、違う国の言葉を実際に聞いて、その言葉と関係のあるものを自分の目で見て、興味を持つようになったら、意味の分からない台詞を繰り返すことはやめると思う。

弟 じゃ、そういう教育制度を作ることができたら、どうなると思う。今はほとんど誰でも英語を習っているけど、生徒がみんなバラバラになって、それぞれ違う言語を習ったら、それはこの国のためになる？経済のことも考えらなければならない。

私 ああ、それは問題点の一つかも知れない。だが俺はこう思うのだ。生徒がこのようにして、自分が本当に興味を持っている言語、自分に合っている言語を勉強することができたら、言語学習が面白くなり、自然に第三言語も習いたくなる。そしてその時は、…

弟 一番役に立つ言葉として英語を強く勧める？

私 そのとおりだ。しかも、第二言語を積極的に習うことによって、勉強の仕方を上手く身に付けることも、言語感覚を育てることもできるはずだ。そして、英語が第三言語になっても、今のように強制的に第二言語として勉強している生徒より、いい結果が出るかも知れない。

弟 んー、そういう妥協だったら、ますます有り得る話に聞こえてくる。定着している英語を失うことなく、多くのスペシャリストを育てることができるから。ま、あくまでも論理的な話だけどね。

私 今のところはね。(笑)

コメント

勉強する言葉を生徒に自由に選ばせてくれない教育制度に何度も不満を感じたことがあるのだが、その制度をどう改善すればいいかと考えたら、以上のようなことが思い描けた。もちろん、問題も少々抱えているが、このような制度を作れば生徒の言語の学習が必ずより豊かなものになると信じている。

結論とまとめ

言葉はやはり不思議なものだ。このテーマを考えれば考えるほど、言葉とは何かずっと分からないまま外国語を勉強してきた気がする。でも、言葉にそういう不思議な一面があるからこそ、言語に魅かされているかも知れない。

この活動を通して、言語の学習が学んでいる人に興味をもたらし、楽しさを与えるものであるべきだと、改めて確信した。なぜなら、嫌いになった言語を強制的に習っても、自らその言葉を使おうとはしない。しかし、使うことのない言語は何の役にも立たないし、上達もしないはずだ。それに、実用に関する問題はともかく、言語の学習に楽しさがなければ、それはとてももったいないと、私は思っている。それは、興味があれば、言語教育はとても楽しいはずだと、自分の体験から言えるからだ。

英語を学んだおかげでイギリスに行けて、日本語を学んだおかげで日本に留学できて、外国語を習って普段関わるチャンスのない人と出会えたから、外国語の学習は人生の可能性を広げるようにも感じている。だが、関心を全然持たずにある言語を習って、そのおかげで自分の可能性が広がったとしても、そこで新たらしく得た選択肢を実際に掴むことがほとんどないと思う。自分の経験からいうと、私は学校でもっとプレッシャーをかけられ、フランス語を外国で生活ができる程度のレベルまで勉強したとしても、恐らくフランスに留学しなかったし、フランス語関連の仕事もしたくなかったと思う。

私に子どもがいたら、この世の中で一番役に立ちそうな言葉だから、多分、英語を習ってほしいと思う。だが、子どもはそれが嫌で、違う言語を学びたいと言ったら、その言葉は例えデンマーク語みたいなマイナーなものだとしても、私はその選択を全力で応援できる気がする。そのほうは、楽しくて、充実した学習で、幸せになりそうだから。

おわりに

今学期の初め、授業でグループに分かれ、話し合いを始めた時は、軽い気持ちで興味のあるテーマを選び、英語について考えたことをグループの皆さんに話してみたが、その時は、3ヶ月以上もこのテーマを考え続ける必要があるとはとても思えなかった。すぐ何かの答えが出て、それで話がまとまるだろうと思っていた。

実際のところ、3ヶ月では非常に短かった。考えをちゃんと整理しておいたつもりで毎週の授業のに通ったのだが、グループ内ディスカッションでは、いつも必ず誰かが私のまだ考えていない質問をしてくれた。又は、考えたことがあっても、あるところについて細かく質問され、自分が思っていることを上手く説明できないことに気付いて、驚いたことが多かった。そのような刺激のおかげで、どこをもう少し考えたほうがいいかが分かり、自分の考えを深めることができた。その結果、テーマ自体が段々展開してきて、私の中にある漠然とした考えが具体化して、その考えをレポートの形にすることが可能になった。

まだまだ答えられない質問もあるが、その質問にまず気付いて、答えを探りたくなかったのも、この活動のおかげだと思う。完全に納得しているとはいまだに言えるようになっていなが、私にとってこれからも大切なテーマであり続く「言語」にもう少し近づけた気がする。だからこそ、今はこの活動をしてよかったと思える。

私なぜ日本語の聞く力に拘ったか

——対話を通して自分の悩みの正体を追究する

ソエン
曾艶

異文化に触れたりする時、カルチャーショックを受けた人が多いであろう。しかし、私は最近、カルチャーによるショックではなく、他人の日本語が聞き取れなくていろいろショックを受けた。

例えば、携帯を買う時、店員さんの日本語がよく分からなかった。結局どんなコースに加入したら自分にとって得なのか、自分が加入したコースはどんなサービスができるか、また利用する際の費用がどれぐらいかかるかはあまり知らずに、家に帰ってしまった。また、授業やゼミでは、他人が話している日本語がうまく聞き取れなかったり、他人の研究にコメントしようとしても、相手の日本語がよく分からないため相手と深く討論できるかを心配していて、自分の発言を控えたりすることもある。そんな時、自分の長年の日本語学習歴・教育歴を考えたら、恥ずかしいと思って、自分の日本語の聞く力がだめだと、すごく悩んでいる。

日本語の聞く力に関する自分の悩みについて、中国人の友達や同じ授業を取った日本人・外国人留学生に話してみた。同じようなショックを感じて悩んでいる人もいれば、ショックを感じた一方、それが当たり前のことで、却って日本語をもっと勉強したい動機になると思っている人もいる。

他人も同じようなショックを受けたと分かり、少し慰められたようであるが、自分はやはり非常に悩んでいる。私にとっては、他人の日本語が聞き取れないということは大きな悩みになってしまった。なぜ日本語の聞く力にそんなに気になるかなどを知りたくていろいろ真剣に考え始めた。また、他人と対話しているうちに、日本語の聞く力に関する自分の悩みに真正面から突っ込んで、それが具体的にどんなものであるか、その悩みを乗り越えるには自分としてどんなことがひつようなのかは、少しずつ具体化してきたような気がする。

1. 対話活動の概要

2011年7月5日と8日に、対話対象である夫（以下ではBと称する）とネットでチャットをした。使用言語は中国語であった。対話対象Bは私と同じ大学で、日本語を専攻として勉強した。卒業後も、私と同じ、大学の日本語教師になった。日本には4回ぐらい、

長期・短期滞在をした。日本語学習歴・教育歴は私と大体同じであるが、日本人と積極的に付き合い、日本語でどんどん交流していくという印象が私にとって強いので、対話対象にした。

B と対話することにより、私は日本語の聞く力に関して特に悩んだ時はどんな時、そんな時、なぜ日本語の聞く力に拘るか、今の悩みを乗り越えるにはこれから自分がどんなことが必要なのか、少しずつ分かってきた。

2. 私はどんな時、特に悩んでいるか

B 自分がよく分からない話題になったら、暫くパニックになることもある。

A ただ暫くパニックになるだけなのか。

B 段々話題が分かってきて、交流もできるようになる。

A 何を話すの。だって話題が分からないじゃないの。

B 例えば、車のことをずっと話していたが、急にほかの話題、例えば、アイドルドラマ。

もし自分がそれに関心を持たず、その面に関する背景知識が持っていなければ、何を話したらいいか分からない。時には、相手とは交流にならない。

A あつ、さっき話したのは普通のしゃべりの場合なのか。

B もちろん、相手は他の言い方に換えたりして話してくれるかも。普通のしゃべりでない場合は、そのようなことがよくあるよ。例えば、専門用語が分からない、暫く相手の話の進展に追い付けない、など。

(中略)

B 暫く分からなかったら、ほかの方法を使ったりすることで、分かるようになるよ。

A 例えば？

B 相手にもう一度話すようお願いしたりして。

A 相手が話す途中なのに、自分が分からないため、相手の話を中断したりすることは、どうも礼儀正しくないと思う。

B 普段の交流と正式な場合と違うね。

A 二人で対話する時はあまり問題を感じないが、すぐ相手に聞くことができるから。もしゼミの場合だったら、皆が熱烈に討論しているが、私だけが分からない。聞くのが恥ずかしいし、礼儀正しくないと思う。

最近、自分の日本語の聞く力の欠乏にショックを感じたのは、携帯を買いに電気屋へ行って、店員の話がよく分からなかった時がきっかけであった。しかし、B との対話の中で電気屋の話が一切に出なかった。業務用語が多くてあまり分からなかったが、店員という会話のやり取りを通して、取りあえず携帯も買ったし電話やネットもできるようになったので、その時のショックは悩みとしなかったであろう。つまり、B が語っている普段

の交流の時は、私も「二人で対話する時」、「すぐ相手に聞くことができるから」、「あまり問題を感じない」。それは、Bとの対話により気付いたことである。

しかし、普段のおしゃべりのほか、正式な場合の交流がある。ゼミのような正式な場合では、相手の話が聞き取れなかったら、「相手の話を中断したりすることは、どうも礼儀正しくない」「聞くのが恥ずかしい」と、私は思っている。

A ゼミなら、ほかの人と討論するんだね。

B その人の研究にある程度知っているだろう。

A 自分の理解力が最低という感じ。他人がどんな話題を話しているか大体分かるけど、その内容が大部分聞き取れない。

B (その人の研究に)ある程度知っていたら、自分の経験や一般的な研究方法に基づいて、コメントもできるはずだよ。

A 一番のショックは聞き取れないこと。

(中略)

A このゼミは事前に概要みたいなものや、論文の目録しか配ってくれないの。

B 概要があったら、それに関連する資料を調べておけば、自分なりのコメントができるはずだ。

A 今回日本に来る前に、そのような問題が存在していると感じたよ。でも、それほど強く感じなかった。中国では、普段は中国語で討論するから。

このように B との対話の中で、「ゼミ」という言葉がずっと中心的なものでキーワードになった。中国とは違って、こちらのゼミでは事前に概要や論文の目録など、簡単なものだけ提出するし、ゼミの使用言語も慣れてきた中国語でもない。他人の研究が初めて聞く私は、他人が話す話題が大体分かるが、「その内容が大部分聞き取れない」ため、他人と討論できないと心配している。

こうして、対話していくうちに、私の本当の悩みは電話屋の店員と話す時など、普段の交流の時ではなく、ゼミに参加する時に起きるものである、ということにやっと気づいた。ゼミでは相手の話が聞き取れないということは、正に自分が感じた「一番のショック」で、しかも反復的に起きるものとして、この2、3か月間ずっと私を悩ませて、目下一番解決したい悩みとなっていると言えよう。

3. なぜ、ゼミでは他人の日本語を聞き取りたい気持ちが強いのか。

確かに他人の日本語が聞き取れなくてショックを感じたことは前にもあった。例えば、中国で日本語のシンポジウムに参加した時、ほかの人の間で行われる質答はあまり聞き取れなかった。そんな時は、自分の日本語の聞く力を疑ったかもしれないが、特に悩んでいるという記憶はなかったようである。

しかし、今度日本でゼミに参加する時、他人の日本語が聞き取れなくてショックを感じただけでなく、いろいろ悩み始めたのは最初の時、自分も不思議だ思う。なぜ、ゼミでは他人の日本語を聞き取ろうとする気持ちがこれほど強いのか。

3.1 ゼミを通して自己表現したい

(対話)

A 日本語の関係で、ありのままの自分を相手に伝えることが無理っていう感じが時々ある？言葉のせいで自分のアイデンティティ(個性)が束縛されて。

B あるかもしれないが、あまり感じなかったというか、自分が気づかなかったかも。

A ゼミの時、相手の話が分からなくて、相手と深く討論できないと心配するので、発言が怖くなってしまう。そうすると、私は口数が少ない人だと勘違いされるでしょうね。

B そうかも。

A 中国では、ゼミの時、他人の研究を議論することがとても好きだった。他人にコメントし、他人の研究に役立つということは、発表を聞く側の責任だと思っている。

B でも、本当に話好きな人だったら、外国語の能力が足りなくても、どんどんしゃべっていくね。話がずれても。

A そうね。なぜ、こちらのゼミではそんなに発言したくなるのか、後は考えた。

B 責任は個人の感じで、或いは、個人の性質というもので。他人に認められたい。

A 多分自分が外向的な人だとか、他人と話すことが好きだとか、そのよう人だと自己表現したい、というわけでもないかも。本心ではない。別に他人に認められる、ということでもない。(中略)

A 自分が他人の研究に全く無関心というわけでもない、ということがせめて相手に伝えたい。

B そう。その点は大事。自分のそういう気持ちを相手に伝えるんだ。自分がある意味では心が有りながら能力がたりないだけだ、ということを相手に分かってもらうのだ。

A うん。日本語の力が限られているが、心をちゃんと持っているということ。

人間は言葉という媒介を使って、自己がどんな人なのかを表現していくことが多い。他人の研究についていろいろコメントし、他人の研究に力になることは、ゼミに参加する自分の責任だと思って、中国のゼミではどんどん発言していた。

他人の研究に少しでも力になりたいものだという自分を、ゼミでは相手に見せたい。一方では、日本語が思うままに使いこなすことが難しく、時々、日本語で十分に自己表現できないと感じている。ゼミでは、他人の日本語が十分に聞き取れなかったら、それを踏まえた上で相手と深く議論できず、自分が責任感を持っている人だ、他人の研究に関心を持つ人だ、という自分を、他人に表現しかねるか心配し、その結果、自分の日本語の聞く力に気になってしまう。

3.2 ゼミという空間を通して、皆と関係性を作りたい

(対話)

A 主にゼミを通して、他人と関係性を作りたいかも。

B 他人との関係は実は広いものだと思う。(あなたが意味しているのは)研究上の付き合いや交流だろう。

A よく発展できる関係を作りたい

B 個々人との関係は研究の面だけではないよ。もちろん、研究に関して議論しているうちに、お互いの関係、つまり、よく発展できる関係を深めていくこともできるよ。

A ほとんどの人とはゼミでしか顔を合わせないから。皆の意見をもらいたい、自分の論文について。

B 個人の付き合いはいろいろな方法があるよ。例えば、メールやメッセージ、電話など。

A でも、他人が発表する時、自分が積極的にアドバイスし、積極的に討論に取り込まないと、他人も熱心に私にアドバイスしないわけね。

B もちろんよ。やり取りは双方向的なもんよ。

A ゼミでは、発言が少ない方よ。

B 他人の研究に全く無関心だと思われたら、皆もあなたの研究に無関心になるよ。だから、現状を変えなければならないんだ。

A そうそう。私もそのことが心配で。

(中略)

A ゼミに参加している人と良い人間関係を作りたいから。ほかの場合なら、聞き取れたかどうかはどうでもいいことだから、悩まずに済んだかもしれない。

B プレッシャーね。普段のしゃべりはそんなプレッシャーはないよ。

A うん。今度日本に来る目的は、先生や仲間の助けとか、彼らのコメントをもらって自分の論文をちゃんと完成することなの。1人の力で博士論文を書くなんて、無理よ。

B そうね。しかし、現状は思った通りじゃない。

A うん。もし先生と週に1回、或いは月に1回、定期的に自分の論文を討論できるなら別として。でも、そうでもなかった。

B C先生とよく連絡を取れば?指導教官だから。

A もっと自分で決めなさいとC先生に言われて、余計にプレッシャーになってしまった。

今度、日本に来る最大な目標は博士論文の作成ということである。今まで自分の研究がうまく進めていないが、日本に来て自分の論文の構造について先生や仲間のコメントをもらったりして、ぜひ日本に留学するチャンスを活用したいと思った。また、皆からいろいろコメントをもらう環境、つまり皆との関係性をまず作っておくことが大事だと思っている。

しかし、皆が自分の研究で忙しくて、ゼミ以外には、普段先生や仲間に顔を合わせるチ

チャンスが少ない。だから、週に1回のゼミという空間をちゃんと活用して、他人と関係性を作っていきたいと思った。

他人が発表する時、自分が積極的にアドバイスし、積極的に討論に取り込まないと、他人の研究に無関心だと思われるから、他人も同じように自分の研究に無関心になり、熱心にアドバイスしてくれないのではないか、と心配している。

他人と交流するチャンスや時間がごく限られているが、ゼミという場を利用して、自分が責任感を持つ人だ、他人の研究に少しでも力になりたいものだという自分を表現し、相手に見せたい。そして、他人の研究に積極的にアドバイスし、討論に取り込むことを通して、他人との関係性が築いたら、私の論文について他人がいろいろコメントをしてくれる、と思っていた。それゆえ、ゼミでは、人の日本語をよく聞き取ろうとする気持ちが強かったのではないかと、ということがBとの対話によって分かったようである。

4. 悩みを乗り越えるには、私にとって必要なことは何か

今、自分の悩みはどんなものなのか、そして、それが起きた心理的原因については、対話によって明確化してきたと言えよう。しかし、いままでのようだったら、悩みは乗り越えられず、論文を完成する前は、恐らくいつまでも自分を苦しめる問題になるに違いない。では、自分にとって、これからどんなことが必要になるのか。

4.1 事前準備は日本語の聞く力に繋がる

(対話)

B その人の研究にある程度知っておかないと。

A 自分の理解力が最低という感じ。ほかの人がどんな話題を話しているか大体分かるけど、会話の内容が大部分聞き取れないの。

B ある程度知っていたら、自分の経験や一般的な研究方法に基づいて、コメントもできるはずだよ。

(中略)

B ほかに自分が持っている知識、つまり蓄積してきた知識も重要よ。

A しかし時間的にきついね。毎回は2、3人、多い時は5人発表するんだ。だから、概要だけに目を通す時もあるよ。

B それじゃ、大きい面から把握しければならないね。構造とか方法論とか。時にはよく分からないのでコメントできないと正直に言ってもいいと思う。

A ええ。先週のゼミであることが話題になった。ちょうど関連する本も読んだし、課題感想文も書いたので、聞いてよく分かったと思う。あなたが言った通りに、知識の蓄積はとても大事だと思う。

B ええ。いろいろな本を読んでおけば、いつか役立つよ。

- A うん。あなたがいつも言っているね。お前はあまり本を読まないって
 B だから、俺は何でも分かるが、何でも精通しないもんよ。
 A それも私の聞く力が乏しいことの原因の1つかも。

他人の発表内容をよく読んだり、関連する研究を調べたりしておくこと、つまり、事前準備は必要である。他人の研究をある程度知っておいたら、日本語の聞く力に繋がるし、他人の研究の素晴らしい点や問題点なども分かるので、他人と議論できる範囲も広がる。このことも他人の研究を尊重することになると思う。私が気になっている他人との関係性を築く面でも大事なポイントである、と思うようになった。

また、対話を通して、本をいろいろ読む習慣があまりない、という自分の問題を感じてきた。普段はいろいろな本に目を通したら、頭の中にあるスキーマがいろいろできて、きっと自分の日本語の聞く力に繋がると思う。

4.2 自分の聞く力や表現力にもっと自信を持つ

(対話)

- A 私は発言がもともと積極ではないか。
 B 聞き取れなかったら消極になるよ。
 A 悪性循環というもの。積極じゃないと、聞き取れなかったものは分かるようになることもますます不可能になる。
 B 或いは、自分の発言に自信がないと発言が消極になる可能性もある。だから、事前準備をしなくちゃ。例えば、相手の研究はどんなものか、問題点はどこか、優れた点は何か？
 A 実は言い出そうとしたが言い出せなかったことは、ほかの人に言われちゃう時もある。肝
 が小さいというか、或いは自分に自信がないというか。
 B 発言に自信がないんだね。

(中略)

- A 今も前の討論がよく聞き取れなかったので、自分が発言することがもしかしたら、前の討論の中でとっくに出てきたものではないか、また、それと全く別の方向のものなのか、と心配している。
 B 外国語(言語)の機能に戻ると、言語はただの道具に過ぎなくて、思想こそが私たちが本当に注目するものだ
 A いろいろ心配して、だから発言が怖くなって。
 B そんな考えをやめて。自分の発言が役立たつもの、完璧なものでない限り、自分は発言しないという考えをやめて。他人を驚かせるほど完璧なものが出るまで、発言を我慢するという考えはだめよ。
 A 日本語で普通に交流することは今の自分にとってちょっと難しいかな。

B みんな同じよ。

A メンズかも。大学の教師で、長年日本語を教えていたのに、こんな日本語レベルだったら恥ずかしくなるので、発言が怖くなってしまふ。

B あなたが発言して、相手は聞く。役立つものなら、聞き入れるが、役立たないものなら、すぐ忘れてしまふ。残ったのはただあなたが発言したということだ。

(中略)

A 昨日の発表でたくさん話したよ。昨天的发表，我还是说了很多

B よかったね。

A 自分から話そうとは思わなかったが、中国のことだから、皆が自然に私のほうから何か知りたいと思っていた。

B そう。一方では、あなたも主役になって、ゼミの皆に関連することを聞いたりすることも可能よ。中国のことでもなくとも。

A そして、最初も私が積極的に発言した。だから、後は他の人は再び発言するチャンスを与えたと思う。

私は何かがあったら、すぐ悲観的に思いがちであろう。日本語が聞き取れなかったら、自分の問題点を客観的に分析して、これから具体的にどんなほうに改善したらいいか、などを楽観的に思うのではなく、それよりもまず自分の聞く力を疑ったりしてしまう。また、結果を気にしすぎるなら、行動もだんだん怖くなり、自信も段々失われてしまい、結局何も始まらないのではないかと、対話を通して考えるようになった。

これからは自分の輝くところを見直し、足りないところも積極的に改善していき、特にゼミでは、もっと自分の発言に自信を持って、思いついたことなら、大胆でどんどん発言することが自分にとって必要だと思う。そして、いつも完璧な結果を考えて、行動を慎むなら、自己表現や他人と関係性を持つことが不可能なので、それより、いろいろ試行錯誤の過程の中で自分がどんな人なのか、他人に表現して、頑張る過程の中で、他人と関係性を築いていくことが自分にとって必要のではないかと思う。

4.3 ゼミという空間を越えて、別の交流の場を作っていく

(対話)

A 自分が少し進歩したと思う。最初は発言が怖かったが、先々週、発表する人は仲がいい人なので、発表が終わったら、直接彼女たちと自分の感想を話した。

B それもいい方法。そう繰り返しているうちに正々堂々に発言できるようになると思う。

(中略)

A 自分はやはりあまり積極的ではなかった。自分が発表するチャンスが少ないけど、問題

があったら、自分の研究について直接他人と交流してもいいと思う。

B そう。でも、あなたに話す気があるかまず確認しなくちゃ。

A 例えば、こちらの指導教官は個別指導はしないとおっしゃったけど、こちらから積極的に先生の所に言ったら、先生がアドバイスしてくださると思う。

B それはもちろんよ。

A うん。夏休みに自分の研究を本気にやるつもり。そして、考えが少しできたら、先生に連絡するつもり。

B いいね。

(中略)

A しかし、今は少し分かったような気がする。受身的に他人が私のところに来て、私にコメントをしてくれるのを待つのではない。

B 当たり前だよ。他人は来ないよ。いろいろ厄介だから。つまり、学部生のように、受身的に受け取ることはだめだよ。

A うん。でも、夏休みの時にとったデータを少し整理して分析してみようと思う。そうすれば、分析の途中で、研究課題を決められるでしょうね。

A この前も先生に言われたよ。まず自分の教育観、つまり、自分がどんな日本語教育を目指すかを決めておかないと。それは前提だと思う。そうでないと、自分の考えはいつまでも動揺しちゃう。

普段、先生やゼミの皆さんと顔を合わせて、交流する時間はゼミしかないと思った。しかし、他人と交流したいなら、自分から進んで交流する場を作ることが可能だと思うようになった。そしてゼミで交流する時間が足りないと考えたら、ほかの時間を利用して、また、メールや個人相談などの方法を使うことも可能であろう。

要するに、限られた時間や空間に縛られず、自分からいろいろ工夫をして、時間や空間をどんどん拡大することにより、他人と交流する場を広げていくことが自分にとって必要ではないかと思う。しかし、行動は考えから始まるが、考えだけにとどまるなら、進歩もできないと思う。

5. 終わりに

最初に電話コースを選ぶ時、紹介してくれる店員の日本語が分からない時に感じたショックと、ゼミに参加した時、他人の議論が聞き取れなかった時に感じたショックは、同一のもので、自分を困らせた同一の悩みを考え込んだ。

しかし、博士の同窓生や「考えるための日本語」という授業に参加している同じグループの仲間たち、特に大体同じ日本語学習歴・教育歴を持ちながら、日本語の聞く力の問題に関して私と違う意見を持っている B と対話しているうちに、今自分を苦しめる一番の悩みの正体がだんだん見えてきたようである。つまり、自分が一番苦しんでいるのは、日本語の聞く力だけに関する問題ではなく、他人とどのように関係性をうくって行くか、また自分の研究に関して他人とどう交流していくか、ということであると言えよう。

ゼミでは、本当に他人の研究に関心を持っていたら、他人の研究に関する情報を積極的に入手しておき、自分の感じた範囲で他人とどんどん議論していくべきであろう。また、ゼミという限られた空間に止まらず、いろいろなルートを通して、他人とよく発展できる関係を自分が積極的に作り、他人とどんどん交流していく必要がある。

次は対話の中で出た言葉であるが、「考えるための日本語」という授業の意味に対する自分の理解になろう。

(対話)

A 自分は最も自分のことを知るはずだが、本当は自分のことがよく分からない。すごく矛盾していると思う。

B うん。ご尤もだ。

A だから、先生が考えた対話活動はそのような働きがあるでしょう

B 「水は後半分しか残らない」、と「水はまだ半分残っている」ということね。(中国語の対話は「“只有半杯”和“还有半杯”的道理」である。「後半分しか残らない」は悲観的な考え方で、「水はまだ半分残っている」は楽観的な考え方であり、つまり考え方や見方の違いを譬えた言葉である。)

A 2人で問題を見るほうが1人で見るより問題の全体が分かってくる。

(中略)

A 悩みがあったら他人と話すほうがいいと思う。人と交流することの重要性かな。

B それがいい考え。内省のプロセスで、そして、進歩するプロセスだと思う。

A 確かに、自分が前に悩んだことは、対話の後に悩むことと違って来るかもしれない。問題の正体を見出すこと自体が非常に大切だと思う。

B うん。自分1人で探すのはとても一方筋で。

A 積極的に日本語を使って交流する態度がとても重要だ。

B その通りだ。態度は全てだ。

自分もやもや感じた問題については、その起きた原因や自分にとっての意義などをまず自分の頭の中で分析して、つまり自分と対話する。しかし、人間は時には自分がどんな人であるか、自分が具体的にどんな問題を抱えているかは分からなくなってしまう。頭の中で自分と対話することも大事であるが、勇気を出して周りの人々に自己開示しどんどん対話していくことは、新しい視点をもらい、自分や自分の問題を見直すこともできる。また、その対話を材料に自分が内省し、つまり、自分とは再び対話していく。

自分との対話→他人との対話→自分との対話→他人との対話→…、このプロセスの中で、自分が感じた問題が明確になり、自分の考えもだんだん深まり、将来の自分に向かってどんどん変革していくのではないかと思われる。それがまさか、「考えるための日本語」の意義であると言えよう。

「for you」を考える ——塾の先生としてのわたし

前原 舞

1. テーマ設定の理由

私の塾には、「夢は叶う、努力しよう！」という大きな理念がある。これが何を表しているかという、「生徒には夢を持ってほしい」ということと、「それを叶えるために、ではどうすればいいか、一緒に考えてがんばろう！」というメッセージだ。いつでも主体になるのは生徒であるということを前提に、講師は「学習カウンセラー」としてその生徒たちをサポートするため、いろんな工夫を凝らしている。その子に合った対応を考えるには、まずその子のことをよく知ることが大切なので、授業中でもいろんなことを話す。テレビの話、歌手の話など趣味の話から、学校の話、家族の話、友達の話、恋愛の話など…。やる気が出ないときには、ちょっとトランプをしたり、なぞなぞの本を読んだりもする。ある時は相談していたことで話し込んでしまい、1時間半終わってしまうこともある。「塾に行ったら一体何をしてるの??」と思われるかもしれないが、それがその子の今後にとって重要な時間であるなら、必要なのである。

塾というと、先生が生徒に勉強を教える、何かすごいテクニックやハウツーを教えてくれるというイメージがあるだろう。そうするとどうしても先生は、自分の授業能力の磨きに力を入れ、他の先生はライバルであり、ついてこれない生徒はそれまでだ、という構図ができあがってしまう。先生が自分の授業力向上に努めるのはもちろん大事なことだ。でもやっぱりその時は、生徒を主体に考えなければならないはずだ。

このような環境の中、私自身も「生徒主体」をモットーに、「目の前にいるこの子のために、いま私は何ができるか」を常に考えてやってきた。この子のニーズを叶えること、それが私の役目だと思っていたのだ。しかし、その考え方が最近変わってきている。というのも、その子のニーズを叶えることだけが目的だったら、そのためには、別に私じゃなくてもいいのではないかとふと感じてしまった。この塾には、他にもこの子のことを考えられて、勉強をしてくれる先生がたくさんいる。この子が必要なことは、誰か別の人も達成することができるだろう。そんなふうに分かれば、いきなり自分のアイデンティティが見えなくなってしまった。私は、なんでここにいるのか。本当に必要だろうか？

だからこそ、自分が「なぜ塾の先生をしているのか」もう一度見直し、そして自分が「塾

の先生として、どうありたいのか」という目標を、私自身が意識して持つことが必要ではないか。今までは、自分の考えはなるべく消し去り、目の前にいる子の考え方に同化するよう努力し、そして彼に今何が必要か・望みは何かということだけを考え、それが自分にできるか・できないかを求める、まるで意思のない「ロボット先生」になっていたのかもしれない。

こうは言っても、しかし塾の講師であるということは、塾という会社に勤める一員であるということだから、塾の理念や要求に答えなければならない。同時に、お客様は生徒と保護者であるから、サービス業として、彼らのニーズに答えることも絶対に必要だ。このような環境での「塾の講師」としての私は、どのようにあるべきなのか。どのようにありたいのか。これをはっきりさせ、自分の中に意識化することが、私のアイデンティティであり、混沌とした「いま」から「未来」へ自分をつなぐものだろう。

2. 対話内容

2. 1 対話相手を選んだ理由

対話相手は、私が勤める塾の室長にお願いした。理由は2つあり、1つは、今回私はこの塾という場所での自分のあり方を発見したかったので、まずはこの塾というのはどういう場所か、根本的に見直そうと思ったからだ。塾のトップは室長であり、彼が仕切る場であるので彼に話を聞くのが一番理想的だろう。彼の、塾への思い・室長としての思いをもう一度聞いて、自分で受け止めたいと思った。その上で、もう一つの理由として、室長は塾での私の様子をよく知っているからだ。彼は、とてもはっきりした理念を持っていて、それは必ずしも私と似ているわけではない。大事にしているものも違うかもしれない。そんな室長に、私はどう写っているのか、私の考えをどう思うのか、興味があった。

2. 2 対話データと考察

一オーダーに答え、結果を出すという仕事

前原 率直にどう思いますか

室長 率直にですか??あ～、すごくおもしろい理屈だなと思いました。たしかにそうだな、というか。for you の精神を追求していくと、自分は自分じゃなくてもいいんじゃないか?って感性は、僕には単純になかったのでおもしろいです。ただ、これは否定じゃないんだけど、そこで自分のこと考えちゃった瞬間それは、for me なんじゃないかな??

前原 ちょっと、for me な部分を持ってもいいんじゃないか?と思ったんです。だって、for you になり切ることは無理じゃないですか?完璧に、for you になり切ることは

できないとしたら、for me の部分は、なんなのかなって。

私の場合、生徒と向き合っているときの自分は、その子にとって必要な存在として
いられるけど、いざ自分に立ち返ったときに、自分とは何かモヤモヤしてしまって、
塾の先生としての私がよくわからなくなっちゃうんです。

室長 なるほど。塾の先生としての私って、どういう答えがあればいいの？（笑）

前原 それがわからない！！から、この対話を通して、見つけていけばいいかな？と！

室長 なるほど！おもしろい！（笑） じゃあ、何から話しましょうか？？

前原 for me になるのは、よくないことだと思いますか？

室長 どうかな？基本的に、その人のために、という気持ちを持っていれば、それは for
you になるからいいんじゃないかな。for you を重ねた結果、「自分よくやったな」
と自分をほめてあげる瞬間自分で自分を認められるときは、for me でもいいんじゃないかな。そういう仕事です。

前原 結果が大事ということですか。

室長 それは当然、僕らは結果を求められる仕事だから・・・それは絶対にしかたない。
それがプロの仕事だから。お金が発生しているからね。

前原 数字ですか。

室長 求められているものは数字であって、結果だからね。生徒が求められているものは、
結果だから。それは、出資もとのお母さんが、何点とったら満足というものを、取
れなかったら、きられる、やめられるということ。生徒が満足していても、切られ
てしまう。その子のためをどれだけ思っている、結果が出せなければだめ。
もっといえば、そのオーダーとして求められているものに答えることがすべてだか
らね。そしてその求められえているものの中心は、数字、点数であることが多い。

前原 結果がでなかったら？

室長 次、結果をだす！これを、絶えず、続けなければならないよね。反省して、じゃあ
次はこういうことをしてこうすればもっとよくなる！ということ、プロとして、
考えなければならない。もちろんいつでも結果が出るわけではないし、でもそのと
きにだめだった、で終わってしまうのは後ろ向きだから。次こうしよう、と理論上
考えて、それを提示してあげることが必要だね。理論上、というのが大事だし。空
想の中で、これとこれができたら、次に何点とれるっていうストラテジーをつく
る！

前原 それは、室長のスタイルですか。

室長 そうだけど、でもこれはふつうにやったら必要なことじゃない？

前原 結果を出そう、ということが。

室長 結果がすべてではないけど、オーダーとして求められていることの中心は結果だか
ら。これをクリアしないと、みんながやめちゃう。やめさせられちゃう。

前原 では、結果をどう出そうか、というところで、自分らしさを出せばいいんですか？

室長 そうだね、でもこれだけ結果、結果っていつてる僕が、一番がつがつしてなくないですか？（笑）

それだけ、笑いも何も、そこ（結果）に対する過程だと思っている。

前原 そしたら、結果を出せないと、塾講師としては失格？

室長 出せない、ではなくて出そうとしないことは問題だね。出せる、出せないというのはおいといて、出そうとしないのは、プロとして失格。結果うんぬんよりも、まずはやろうとしてるかどうか、創意工夫をしているかどうか、別にこの仕事じゃなくても全部の仕事で大事なこと。

前原 私は創意工夫してますかね？

室長 めっちゃしてるじゃん！それを前原さんはもっと自分で認めてあげてもいいんじゃない？？

塾というものは、ひとつの会社でありサービス業だということを、改めて感じさせられた。お客様は、出資元である親であるということは、親の求めるオーダーに答えなければサービス業としてなりたない。究極的には、目の前の生徒ではなく親を満足させることが目的であり、そのために数字を出すことが仕事であると考えたら、とても無機質に感じられてしまった。でも、ある意味これが現実なのかもしれない。生徒だって、学校で求められるものはテストの点数であり、それにより成績がつけられ、進路が決まる。目的達成主義は、とても現実的な、教育の形なのかもしれない。

一グレーな目標の中は、グレーなことしかできない

（中略）

室長 0点では幸せな人生がない。幸せだったらみんな塾に来ないから。そしたら、彼らがとりたいたいと思う点数を取らせてあげたいと思うでしょう。それを、どうやってみるか？をがんばる！

前原 やっぱり、私じゃなくてもいいんじゃないか？とってしまいます。

室長 一期一会、ていう言葉があるじゃないですか。その子の担当になったからには、何か運命があるでしょ。だからやっぱりそれは考えるべきであると思う。

自分じゃなくてもいい、とってしまえばそれまでだから。

僕は、誰か他の人でもできるって思うことを、し続けるのは嫌だなんて思う、だから、誰かができるかもしれないけど、それを自分の中で精一杯表現する。

そういうときに、人と比較しちゃいけない。比較することは、結局優越感か劣等感しか生まないから幸せにならない。（笑）

自分はこうだって思うように、自分でしてるだけ。

自分を評価するのって、最終的には自分だから。だから授業中でも、他人は関係ない。あの人はあの人だから。って言ってるし。

前原 私の授業で、強いなと思うところは？

室長 安心感があるよね。生徒が、つまんなそうにしてない。ちゃんと生徒が前を向いている。顔と顔を見ているよね、人間は嫌な人を前にしたとき目を下げるけど。その生徒が求める距離感にちゃんとはまっていつてる。引かれることがないっていうのかな。それはすごく難しいことだから。距離感や関係性をとるのがすごくうまい。

前原 これが、結果につながるのかな??

室長 ここぞという瞬間に、生徒に言いたいことを伝えるらえる関係性をすでにつくっているよね。生徒は、心を開いてない人の言うこときかないから。俺は、そのために仲良くなって笑わせてるから。(笑) ここなんだよ、というときに心にひびくために仲良くなっているから。

前原 そこまで考えてませんでした。(笑)

室長 うん、仲良くなるためへの目的意識だと思う。自分のいうこときくようになるから!!ここぞっていうときに、きいてもらうために仲良くなってる。(!)だから、仲良くなることってすごく大事だよっていう研修があるし。まあこれは僕の場合で。完全に目的至上主義だからね。すべてのことに理由がないと動けない。(笑)

前原 目標がグレーなことを、認めてあげたらだめですか。

室長 その中でやってることは、グレーなことが多いんじゃないかな。僕は、こうしてあげたいっていう目的ははっきりさせるけど、そのための手段はグレーにする。目標は定めないと、何しても意味がないから。

前原 目標を達成できなかったときに、彼らに「あ、やっぱりできなかった。」と思わせてしまうのが嫌です。

室長 でも「こうだったらどうしよう。」と悩んでも上にはいかない、前向きではないよね。そうならないために、失敗しないためにどうするか、を考えるのが前向きなんじゃない?あと、レアな状況のために、自分のセオリーを崩すのはよくない。結果が出なかったら、そのときのセオリーを使えばいいんじゃないかな。

前原 そんなに全部セオリー化できるんですか!

室長 できるよ。僕はなんでもはっきりさせたいから。そうじゃないと、自分がそれを技術として伝えられないから。

おぼろげなもののために、おぼろげな努力をしたら、それはおぼろげな結果になっちゃう。

目的至上主義な室長のお話は、とても筋が通っていて説得力があった。そして私がいかに目的や目標なく生徒と向き合っていたかを考えさせられた。私は、子供は勝手に成長していくものだと思っていた。これは、別にその子がどうでもいいというわけではない。子供は無数の可能性を持っていて、それを私が操作するようなことはおこがましいのではない。子供は子供なりに、考えて、自分で自分の成果を積み上げていくものなのだから、私

はそれを見守り、認めてあげればいい、と。しかしその考えは、あまりに無責任だったのかもしれない。

一生徒を認める、愛するということ

(中略)

室長 前原さんは、この教室でどういう先生でいたいですか。

前原 うーん・・・私は、この塾でこういう先生でありたい！ということにあんまり興味がなかったかもしれないです。

室長 興味が無い、というよりは、気にすることがなかった、考えることがなかったということじゃないかな。これを考えたら、かなり変わると思う！

前原 私は、生徒を一番愛せる先生になりたいです！

室長 いいじゃん！愛した結果どうなりますか？

前原 自信をもってほしいんです。自分に。

室長 どうやって自信を持たせますか。

前原 私は、(その子が) 何をしても、認めてあげるから。一緒にがんばっていこうと。

室長 その結果、生徒はどうなりますか。

前原 自分に自信が持てたら、なんでも楽しくなるじゃないですか。目標も持ちやすくなるし、そういう未来の自分にも興味もてるし。やりたいこともポンポンでできると思う。

室長 そのために、日々どうしますか。

前原 その子を否定することを、一切言いたくないんですよね。だから、もし、その子が目標達成にそぐわないようなことをしてしまったときも、認めてあげたい。

室長 すばらしい！じゃあ認めて、そしてどうしますか。(・・・) 認めてあげる、愛しているからこそ、言ってあげることがあると思う。愛してるからこそ、認めているということを言わない場合もあるかも。今の前原さんは、なんでも受け止めてあげちゃうから、生徒のほうは、受け止められておわってしまっているかも。

私は、「その子を私が認めてあげること」については、とても自信があった。でもたしかに、それがその子にとって本当にいいのかどうかは、考えていなかったかもしれない。たしかに、私がもしその子のことをちゃんと認めて、理解し、わかってあげられているのだとしたら、そうではないと言えない言葉があるはずだ。室長は、私のことを「受け入れてしまって終わっている」といったが、もしかしたら私はその子を受け入れているようで、実はまったく自分の中で考えようとしていなかったのかもしれない。どこかで「私とは関係ない、勝手に成長していくこの子」として見ていたのかもしれない。では、この子を受け入れるとはどういうことだろう。それは、自分のことばで、自分の感性でこの子を表現することではないか。この子はこういう子だ、そしてこうすればこの子は幸せになれる、と、

私はその子の未来のビジョンを持つということが、この子を自分の中に受け入れるということの第一歩なのではないかと考えた。

一目の前の子のことを、本当に考えるということ

(中略)

室長 前原さんにとって、愛とは何ですか？

前原 認めてあげること。

室長 認めてあげること、幸せになれなかったらどうしますか？

前原 たとえば

室長 テストで10点とってしまったら。(笑)

前原 (笑)でも怒らないし、否定もしないですね。喜びもしないけど。生徒の悲しみは私の悲しみですから(笑)。まずどうしたの？って話聞いて。言い訳すると思うから。そっか〜って言って。(笑)そしたらその話の中で、ポイントを見つけて、ここはできたじゃん！とかなんとか、って言って気持ちを上げさせますね。

室長 ちゃんとやってるじゃん！(笑)

きっと、前原さんは、人に自分を受け入れてほしいから、自分も受け入れてる。愛されたいから愛している。すごく素晴らしいことだけど、それは前原さんの考えだよ。…例えば前原さんは、「点数がすべて、大事」とは、考えてないかもしれない。でもこと生徒は、点数をとるためだよ、って言ったほうがいい子もいる。前原さんの趣向ではないかもしれないけど、その子のことを考えたときに、言ったほうがいいかもしれない。前原さんは傷つけるようなことは言いたくないけど、その子にとっては一回傷ついたほうがいいかもしれない。

前原 (言わないことは)それはだめですか。

室長 だめではないかもしれない。でも、それがそのこにとって必要なことだったらどうするの？自分が言いたくないから、言わないというのはそのこのことを考えてない、for me になってしまう。

前原 自分が言いたくないこと言ってたら、ストレスになりませんか。

室長 そこまでなったら、それが変えられないところだろうね。でもその軸を中心に、幅を広げていくことが、人間としての器の拡張だと思ってる。

この対話をはじめて、ここでついに核心に触れた気がした。室長は、本当は自分の生徒に、宿題を出すことをしたくないらしい。それは、自分が丸つけするのが面倒くさいし、コピーしたり用意したりするのもわずらわしいから。でも、それが生徒のためだと思うからやっているというのである。確かに自分はやりたくないが、それは自分の核心を揺るがすようなものではない、ちっぽけなプライドのようなものだから、それは生徒のためなら拡張できる場所なのである。私だってそうだ。大学の指定校推薦をもらいたいと生徒がいう。

そしたら定期テストの点数が命になる。私は本当は、点数とることがすべてとは言いたくないが、それを言うことがその生徒のためなら言える気がする。そこで、「自分らしくない」と悩む必要はないのかもしれない。

では、私が本当にしたくない、自分の理念に反することは何か。それは「否定すること」である。私は室長にも言ったが、生徒を愛せる先生になりたい。もっと言うと、そんな自分を愛したいと思っている。生徒を愛している自分が好きだから、そうになりたい。だから生徒にも、自分自身を愛して、認められる人になってほしい。自分を否定するようなことを言ってほしくないし、させたくない。そのためにはどうしたらいいか？具体的な目標を決めたら、必ずそれを実行させることだ。私が一緒にいるときは、様子を見てられるし、時には無理やりやる気にさせたり気分転換に話したりできる。でも、私はもちろん塾でしかその子と関われないし、いつでもその子のそばにいてあげられない。目標達成のためには自分ひとりの時にどうがんばるかが重要だ。そんなときに、私が伝えたいのは「お天道様が見ている」という言葉だ。自分がこんながんばっている姿は、親は見えてないかもしれない。宿題をちゃんとやってきたのに、紙を家に忘れて、私に伝えられないかもしれない。でも「お天道様が見ている」。お天道様は、自分ががんばっているときも、逆にがんばっていないときも全部見ているだろう。そしてそのがんばりに見合った成果をちゃんと示してくれるのだと。本当は、それは他でもない自己評価であるのだが、それに気づくまでは、お天道様に助けてもらっていいだろう。私は、このように自分が大切だと思う、自分の糧になっていることを、自分の大切な生徒にも伝えていきたい。

3. 結論

「for you」の精神を持つことは本当に難しい。私は、2年間塾の講師として続けてきて、自分は完全に for you を理解し実行していると、少し傲慢になっていたのかもしれない。というのも、for you を考えられる人は、まず自分のことを考えられる人ではないか。それは、for me という形ではなく、「I do it for you.」のIの部分だろう。このI、自分のビジョンをしっかりと語れない人に、他人のビジョンを考えることはできないのだ。

私は、生徒を愛する先生になりたい。こう言ったら、室長は、「それは前原さんも愛されたいから」だと言った。そのときは、それは違うと思った。私は、別に生徒に愛されたいから生徒を愛するのではない。生徒を愛している自分が好きなのだ。でも、実は私は、生徒を愛している自分を、自分に愛してほしいのかもしれない。そう思うと、室長の指摘も一理あるな、と感じた。

生徒を愛するとはどういうことか。それは必ずしも、塾での業務と一致しないのかもしれない。生徒が望むこと、オーダーは点数を上げることであつて、愛することは別に求められていないかもしれない。でもそれでもいいのだ。今はもう、私の中心に「愛する」という核がある。これを私は信じていることができるから、自分が生徒のために考えることがちゃ

んと「for you」だということ信じることができる。そうすればあとはやはり、どれだけfor youになれるかが課題だ。目の前の子の今を見つめ、過去を見つめ、将来を見つめられるようになりたい。そうしてその子が、自分自身のことを愛し、そして同じように誰かを愛することができるようになったら、こんなに私が満足できることはないだろう。

4. おわりに—この活動を通して

「自分の過去・いま・未来をつなぐもの」としてテーマを選べ、と言われたとき真っ先に考えたのが「英語、教育、先生」だった。一番身近な、親しいものとして塾の先生を選んだが、この活動を通して、まさかこんなに「塾の先生」がわからなくなるとは思わなかった。何かひとつのことに対して、こんなに長い間考えることはあまりないだろう。しかも、それはモヤモヤした概念から、他人に伝えるために自分の言葉に変換し、発信しなければならない。うまく伝えられずに、でもうまく伝えられない原因がわからなくて悩んだり、うまく伝えられても、まったく予想してない意見を言われたときに、自分のこれまでの価値観が揺らいだりしたこともあった。特に、自分の意見があって、他人の意見があるとき、すぐには頷けないことがある。「もうまったく考え方が違う」「根本の価値観が違っている」など、いろんな理由を思いつく。しかしそこで、「私とあなたは違う」と片付け、そういうふうを考えることをやめ、切ってしまうことはやはりもったいないと思う。私はそこで、一度自分の価値観を崩してみた。今までこれが自分のやり方だ、と思っていたものやものの見方を、一度破ろうと考えた。これは、正直とても勇気がいることだった。迷い、諦め、悔しい気持ち。でも、そうやって崩したとき、相手の言っていることを本当に自分の中で理解できた気がした。同時に、自分の中でどうしても崩せないところ・自分が大事にしている部分があることにも気づけた。それでも今は、自分が前より寛容になれた気がするし、それまでの自分とはまた違うと、晴れ晴れした気分でもある。

この活動では、価値観のぶつかりが多く現れるが、そこにこそ意味がある。ぶつかるためには、自分の考えがあり、他人の考えがあるということだ。そこで意見がぶつかった人は、このままではレポートを終わらせられない、と思うはずだ。自分の考えを言葉にするからには、やはり伝える人がいて、その人になんとか伝えたい、納得させたいと思うはずだから。最終的にレポートを作るのはその人自身だから、どうなるかわからないが、そのレポートの構成は、まさにその人の生き方そのものだろう。

異なる価値観に出会うこと ——私にとっての目的とは

横山愛子

1. なぜこのテーマか

私は日本語教師をライフワークとしたい。なぜかという、異なる文化や言語を背景とした人と常に出会うことができ、その人との考え方や生き方にふれることによって自分が豊になると考えるからである。たいていの場合私は、考え方や価値観の違いを自分の幅を広げることにつながると考えているので、その違いに出会うことを楽しいと感じるし、そのように感じるからこそ今も留学生寮のアシスタントをしていたり、海外から来た高校生の日本語教育に関わっていたりするのだと思う。しかし、これまでの異なった価値観との出会いを振り返ると、全てがスムーズに自分のものとして取り入れられたのではなく、時にそれが非常に大きなショックとなり、自分の考え方の根本を考えなければならず自分の核となる部分が激しく揺らいだという経験も少なからずあった。

私はスウェーデンに留学中、様々な価値観や考え方の違いに衝撃をうけた。一つの例をあげると、平等に接することに重きを置くという考え方に「冷たさ」を感じていたことである。インターンシップ先の同僚は、私がスウェーデン語で困っていても、誰も助けようとしなかったのである。「私がスウェーデン語ができないということは、同僚は知っているはずなのに、なぜ声をかけてくれないのだろう？噂には聞いていたけれど、スウェーデン人はなんて冷たいんだろう。日本のように、気遣うという習慣はないのだろうか。」などと考えるようになった。このように自分の「常識」で理解できない世界に出会った私は、スウェーデン人の友達と様々な考え方の違いについてディスカッションをする中で、いくらか見えてきたことがあった。スウェーデンでは、「助けて、手伝って」と言われるまで手を差し伸べないことがある。言われもしないで手伝うことはその人を弱者としてみなすことになり失礼につながるという考え方があるからだということがわかった。

今でも私は日常的に価値観の異なりを経験し、時にそこから前へ進めないことがある。それは教育実践の場や身近な人間関係など様々な場で起こっていて、そのような場や関係性について真剣に向き合おうとすればするほどうまくいかないことがある。このような体験も含め、異なる価値観に出会うことの意味を考えると、その時、その場で私と出会った人たちが、今の私の生き方に影響して、その出会いが今の私を作っていると考えられる。そこで、これまで私が価値観のぶつかりをどのように捉えて、乗り越えていったのかを軸に、過去—現在を振り返ることは、自分を見つめなおし、これからの自分のスタンス、生

き方を発見することにつながるのではないかと考えた。最終的には、それが現在の日本語教師としての自分に、さらには将来の私にどのように影響するのかを具体的に考えてみたい。

2. 対話活動

2-1. 対話相手を選んだ理由

上記の例で述べたように、スウェーデンでは価値観の異なりを経験することが多かった。そしてそれを乗り越えるきっかけになったのが、スウェーデン人の友人との語りであった。スウェーデン人が皆同じ考えを持っているとは言えないが、社会システムやそれに基づく家族観や人間関係は、ある特定の地域やコミュニティに住む人の考え方に共通した影響を与えることが考えられる。事実、その友人と対話を通して、同僚の「冷たい」態度を理解するための心の準備ができ、同僚と話し合うきっかけとなったのである。さらにその友人自身が私とは異なる価値観をもち主であること理由に加え、今回の来日に合わせて対話活動をさせてもらうことになった。対話は英語で行い、下記のデータは筆者が訳し記載し、キーワードとなる単語はそのまま引用した。

A：筆者 J：スウェーデンの友人

2-2. 対話

異なる価値観に出会ったとき、どのようにして乗り越えるかという問いをたて、お互いの体験や考え方を出し合うという形で対話を行った。

～Good Intention～

友人関係の話から一

A：違った価値観を持った人とでもやってけるのかな？

J：その人がいい人じゃないと、問題になるかもね。その人が建設的な考え、そうしようとする意志があるならできると思うよ。

A：じゃあ、解かり合おうっていう意志があれば、価値観が違っててもやっていけるってことなんだね？

J：価値観が違ってても、やっていけるんじゃない？アイスクリームのバニラが好き、私はチョコってなっても、2つの意見はそれぞれでいいでしょ？意志がある人は、そういう意見を認めるんじゃないかな。

ここでのキーワードは Good Intention である。筆者はこれを「そうしようという意志、建設的な考え」と解釈した。価値観が違うことを認めることと、それに対して建設的な意見を述べて行動することが重要であるという考えが J の根底にあることが分かった。確かにこの意志がなければ、相手の考え方を知ったところで、自分の意見を通すような行動を起こしてしまうかもしれないと思った。またこの考え方は私たちのグループ討論であがった「お互いが解りあおうとする姿勢」のことかもしれない。

～価値観が異なった時、どうやって折り合いをつけるか～

A：でも聞きたいのは、価値観が違う人とやっていかなきゃいけない状況にあった時、どうするかってこと。折り合いをつけるって大切なことだと思う？

J：それはそうだよ。同じ目的あるなら、、目指すところが同じならできる。でもそれぞれが違う目的をもっているなら難しいね。

A：そうだよね。じゃあ、国が違っても考え方が違っても、同じ到達目的があればやってけるってことだね。

J：そう。そのゴールに向かっていろんな手段が考えられるけどね。

A：その折り合いをつけるためにはどうしたらいいんだろ？

J：じゃ、何がその折り合いをつけることになるのか、何がそれを難しくするか考えてみようか。

「折り合いをつけるには？」

促すもの	難しくするもの
建設的な考え、折り合いをつけようとする意志	プライド
同じ目的をもつこと	偏見
柔軟性	強い信念
リソース、選択肢の多様性	欲
相手をよく聴くこと	金
譲る	地位

価値観の異なりを乗り越えるための重要な点として、Good Intention に続き、同じ目的を持つことを J は提示した。しかしその前提があるとして、どのように「折り合いをつけるのか」がわからなかったもので、まず、対話の内容をメモに書きながら、表にまとめた。筆者は出したキーワードがどちらの分類になるのかわからないものもあったが、二人で話

し合って、分類した。その中でも「譲る back off」について話し合いが進んだ。

～back off 一步さがって譲ってみる～

J：面白いね、このリストの「促すもの」のほうの特徴をみると、こういうたくさんの良い点は良くない特徴になるね。つまりこの良い点を持った人はたぶん弱い人になるよね。

A：弱い人？

J：うん、折り合いをつけるには、他の人が何かを望めば、譲って、あきらめる。(譲る、あきらめるという点で) そういう人はこの社会では弱い人ってみなされるよね。でも実際それってかなりいい駆け引きじゃない？もし一緒に目的を達成したければ、譲れる (be able to “back off”) っていうのはかなりいいよね。

A：“back off”ってどういうこと？譲るっていうことはあきらめるっていうこととは違うんだよね？折り合いをつけることになるの？

J：そうだよ、あきらめるってことだよ。それは目的じゃないけど。例えば、さっきのかわいいアイスクリームの例に戻るけど、電車で行くか自転車で行くかっていう買いに行く手段は譲り合える。でもアイスクリームを買うっていう目的は達成できるよね。そういう過程で、譲った方は弱い立場って見られるんじゃない？手段をあきらめたからね。でも、結局アイスクリームは買えたからいいかけひきでしょ。

A：“back off”っていうのは、目的を達成するまでの過程の一部分、小さなことを譲るっていうことで、目的はしっかり達成するってことだね。

J：そう、目的はあきらめられないよ。折り合いをつけなきゃ。

A：そうだね。

J：折り合いをつけたいなら、“back off”しなくちゃいけないって思う？でも二人とも譲らなかつたら、どうなる？

A：うーん、私が知りたいのは、そこなんだよね。そういう状況でどうするのかってことかな。

J：そしたらこの表のここ(折り合いを促すもの)に戻るんじゃない？

A：でもその人が、“back off”はする価値があるって知ってれば、少しは違うかもね。

J：でも、たいてい、プライドとか欲っていうのが、小さなことをあきらめるのを妨げちゃうんだらうね。

ここで折り合いをつけるには good Intention、同じ目的を持つこと、それに向かうための手段を譲り合うことが大切だという流れがあった。「譲る」という態度は一見自分の意見や目的をあきらめることのように見えるが、その先にある目的を達成するのであれば、折り合いをつけられる。「譲る」という姿勢の中にも「目的はあきらめない」という強い意志が見られた。その目的が異なってしまう場合はどうなるのかという問いに関しては、また

折り合いを促すにはどうした良いかという議論に戻るようになってしまった。インタビューの時には議論が進まなかったが、この目的というものはいくつの事をさすのだろうか。何か目に見える成果や行動の目的としても捉えられるが、少し大きすぎるかもしれないが、生きるための目的と捉えらえることも出来るかもしれない。生きる方向性、スタンスとしても捉える事が出来るのではないだろうか。

3. 結論

異なった価値観にぶつかった時、私はどう捉えて、どう行動しているのだろうか。もしその人とあまりかかわる機会や時間が少なければ、その人の価値観をその時だけ取り入れるのもいいかもしれない。しかし、本当に深く付き合いたい、その現場に深くかかわっていきたいと思うのであれば、そこで何が出来るのか、どうやったら理解できないという状況を理解することができるのか一緒に考えなければならないと思う。その初めの一步として、「理解しよう、知ってみようという姿勢 good intention」をもつことが重要である。これは対話活動とグループでのディスカッションから共通して得た考え方である。次に共通の目的をもつことができれば、たとえ価値観が異なってもやっていけるという意見がでた。さらに「目的はあきらめない」ということは自分の本当に成し遂げたいことや自分らしさを貫くということだと思う。このように目的を解釈すると、何らかの活動における目に見える目的として捉えることもできるが、自分の生きるスタンス、方向性として捉えることもできるのではないだろうかと考えた。インタビューでは共通の目的をもつことが価値観に折り合いをつけることにおいて重要であるという意見がでたが、生きるスタンスとして考えれば、その異なりと重なりから目の前の目的ではなく新たな目的が見つかるかもしれない。「目的はあきらめない」というときの目的という語は譲れない自分らしい核として考えられるが、誰と話してもびくともしない固定的なものではないと私は考える。なぜなら対話を重ね、自分の核となる部分を自らのことばで語っていくことで、自分の核となる部分を発見し、その核となる部分が対話によって更新されていくものなのだろう。

異なる価値観と出会うとき、自分の価値観を投げ捨てたり、相手の価値観を全て受け入れたりするのではなく、相手の価値観との異なりや重なりを探していく過程で自分の価値観を築き、自分自身の生きる目的を探していくものではないだろうか。人によっては全く価値観がかわってしまうということもあるかもしれないが、私は自分の変えられない部分は大切にしていきたいと思う。

この体験は現在日本語教師として関わる私が、様々な背景をもつ生徒を接することに役立っていると思う。相手の行動を、相手の背景や考え方を知ることによって理解するという体験を通して、私は目に見える行動や結果や自分の価値基準だけから、即座に判断することはしなくなったように思う。具体的にいうと、学校の規範や、日本社会での捉え方、そして私自身の固定化した枠からだけ見るのではなく、その人の背景など丸ごと見ていくことで、接し方や教え方が変わってくるのだと思う。

今まで色々な人との出会いを通して、様々な考え方や価値観を知り、時にはぶつかることもあった。自分の価値観は変わることがないだろうと思っていたが、私の基準というのはこの価値観のぶつかり合いを経て、変化してきていることが見えてきた。現在私は、留学生や、また外国から来た中高生の日本語教育に関わっている。彼らたちの立場をどのように理解したらよいか、そしてどのように関わっていきたいかを考え続ける教師でありたいと思う。またそうすることで自分の価値観を更新し、自分づくりをしていきたいと思う。

4. 終わりに

異なる価値観を持つ対話相手にインタビューをすることは私にとってとても意味のあるものだった。それは単に異なる価値観に私が触れるということに留まらず、「譲る」という考え方、生き方のスタンスのようなものに触れることができたからである。これはインタビューに限ったことではない。偶然にも一緒になったメンバーと約13週間にわたり対話報告、レポートの執筆とコメントの交換、グループ討論を続けてきた。それぞれが違うテーマではあるが議論を重ねることで、それぞれの考え方の異なりや重なり気づくことができたことを嬉しく思う。それこそが異なる価値観がぶつかりあう瞬間であり、それぞれの生き方に触れることになったのではないかと考える。

共通の目的をもっていけば、価値観が異なってもやっていけるという考え方が対話を通して明らかになった。私が今まで問題視をしていた“異なる価値観とのぶつかり”は実は問題ではなく、共通の目的があれば、そこにたどり着くまでの道は様々である。さらに、対話を終え、自らのレポートを読みなおし気付いたことがある。それは、その人にとって目的とは何かと考えたとき、それは何についての目的なのかという視点からみると、一見異なってみえる「目的」にも共通のものが見いだせるのではないだろうか。結論で述べたように「目的」がある活動の成果をだすことや、自分のレポートを完成させるという目の前の目的のことではないと考えることができる。これを大きな意味でとらえると、人生の目的、生きるスタンスとも解釈することができるだろう。

本授業では、それぞれの解決したい問題や、疑問、興味を自分との関わりを捉えなおすことを試みている。そしてその目的というの一人ひとりが過去—現在—未来をどのように意味づけ結んでいくかである。私たちはこの人生の目的、生き方を考えるという大きな目的をもってこの活動に臨んでいたのではないかとレポートを書きながら実感している。

おわりに

最後までお読みいただき、ありがとうございます。NND48 が作りだした、「わたし」を軸にした世界が伝わっただろうか。

ここで、この世界をより味わえるように NanNanDarou と模索し続けた 13 週間、「考える日本語」私たちにとってどんな意味があったのかを考えてみたい。まずこの活動は「わたしとテーマの関係」から出発した。その関係には、自分にしか選べない背景や疑問や悩みがあり、自分にしか探せない答えがあった。その答えは、他のレポートの課題のように本には書かれていないので、自分に問いかけることしかできない。しかも自分が軸になっているので、そう簡単に扱うこともできないのである。まさに自分との対話である。

しかし、この活動は「自分との対話」では終わらない。その軸となる自分の考え方に、新たな視点から意見が入ってくる。「当たり前だと思っていたので考えたことはありませんでした、、、」「今までこんなに一つのことについて考えたことないです。」この発言から、今まで経験したことのないくらい一つのことをじっくり考える作業であり、社会の現状、一般論、自分がこうだと思って疑わない考えを問い直し、崩す作業だったともいえるだろう。そんなに大変な活動なのに、毎回授業に来てしまう、みんなの意見を聞きたくなるような時間がそこにはあった。NND48 の出席率はかなり高いと言える。(無欠席、無遅刻の私たちに拍手!) では、その魅力はなんだったのだろうか?

一見、個人個人がそれぞれの見つけたい答えを探し、書き上げるようみえるこのレポートをじっくり読んでみると、5 人の共通点が見えてくる。それは、この答えの発見が自分 1 人で見つけたものではないことだろう。そこには、対話相手がいて、そしてこの NND48 のメンバーがいた。「みんなの考えを知ることがなかったら、このレポートは辛く、書き上げられなかったかもしれない。」つまり、このグループでの対話は、新しい視点や価値観との出会いだったとも言えるだろう。そして、自分とは異なる視点や価値観を、単に違うものとして終わらせるのではなく、新たな視点から自分をもう一度考え、これからどのような行動をとるのかという将来を歩む道を考えるきっかけになった。

自分を軸に過去・現在・将来を結ぶテーマについて書くレポートであるだけに、「わたし」なしにはかけないレポートである。しかし、あくまで“レポート”であったのに、この活動を終え、皆のレポートを読みあうと、それぞれが結果を見つけ、新たな一步を踏み出そうとしていることが見えた。課題であれば、そこで良いレポートを書いて、良い評価がもらえればいい。でも NND48 の文集は、ただのレポートだけでは、終わらせられない。書き終わった感想を聞くと、「すっきりしたけど、、、」「進歩した」「頭では分かったけど、行動に移せない」という声が聞こえた。悩み解決をしたと思ったら、今度は新たな課題を見つけてしまったようだ。つまり、この「わたし」を軸に「考える」という営みはエンドレスである。そしてこの経験を共にしたわたしたちは、これからも自分の生き方を探していく。それはわたしの生き方に希望をもち、「わたし」を生きていくことである。